

感染症と戦争

多様な生き方を認め合う「連帯の社会」を

久林高伸

(二財) 同和教育振興会講師団講師

はじめに

親鸞聖人が生きられた時代は、戦乱や疫病が続く激動の時代でした。藤原氏を中心とした貴族政治から、さまざまな内乱を経て、武家政治へと社会が移行しました。また、1230年から1231年にかけては、「寛喜の大飢饉」が発生し、疫病も流行しました。翌年も飢饉は収まらず、餓死者や病者の数が膨れ上がったと伝えられています。

専如門主が『念仏者の生き方』で「世

界規模での人類の生存に関わる困難な問題が山積しています」と、すでに今日的課題を明示されていますが、私たちにも親鸞聖人の時代と同じような困難な出来事が、形を変えて身近なところに迫っています。

その一つは「感染症」です。私たちは、変異を繰り返す新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に大きな不安を感じながら日々の生活を送っていますが、まだ終息に至っていません。

次に「戦争」です。ロシアによるウクライナ侵攻により人道危機が報道されて

います。その他にも報道されずに私たちに知らされていないサイレントクライシス(イエメンでの内戦、ミャンマーの軍事クーデター等)が多く発生しています。

社会防衛から生じる社会不安

COVID-19のパンデミック(世界的流行)は、人類が「感染症」に対して依然脆弱であることを私たちに知らしめました。

「感染症」の発生は、さまざまな要因が考えられますが、人口密度が高く人の移動が激しい場所で起こりやすいと言われています。そして「感染症」と「戦争」はしばしば歴史の中で重なり合って私たちに迫ってきました。戦争が起きると、物資や人員の移動の活発化により、多くの兵士たちは密集した状態で長時間過ごさなくてはならないため「感染症」とは常時隣り合わせとされています。

例えば「スペイン風邪」では、1918年3月頃から1920年まで三度の流

行を繰り返し、世界中で少なくとも5千万人以上の人が亡くなりました。その背景には、第一次世界大戦において、アメリカから多くの兵士たちがヨーロッパに向け大型船で派兵される中、船内がクラスタ化し、世界中で急速に感染が広がったと言われています。日本でも1946（昭和21）年4月以降、海外各地からの復員兵を乗せた引揚船が入港しますが、船内で「コレラ」を発病し、それらが各地に広がったと記録されています。

私たちは、未知のウイルスを前にすると、恐怖心が生じます。「感染症」に対する向き合い方というのは、「正しく恐れる」ことが基本ですが、「未知なる病」に対する不安・恐怖が、ストレスを伴い感染者への「嫌悪感」へと変わり、それが「憎悪」や「差別」という形で現れる場合があります。COVID-19の感染が確認された初期の頃「自粛警察」や「感染者バッシング」が問題視された事例が物語っています。そして「感染症対策」を建前に、「感染者の排除」が正当化され

たことが多くありました。「感染しない、させない」という「命を守る取り組み」が「感染者を隔離する、感染を疑われる人を遠ざける」という間違った対応へと変容してしまった事案が多く発生しました。

過去においても、ハンセン病患者に対して、本来はハンセン病の治療を目的としなければならぬのに、患者の「排除、撲滅」を目的化した「終生隔離政策」がとられました。

14世紀のペスト流行期における迫害も深刻なもので、パニックに陥った人びとはその原因を「ユダヤ人」にすり替えていきました。「ユダヤ人が井戸に毒を入れていた」といったデマが流され、それを信じた民衆によって数多くのユダヤ人が虐殺されました。

街角のヘイトスピーチ

社会不安から生じる嫌悪感情は「私たちの社会や身近な人間関係でさえも分断

していく力がある」ことを自覚する必要があります。そしてその感情は、具体的な「ヘイトスピーチ」や「排除行動」に発展していった事実も歴史から学ぶことができます。また為政者が偏見、差別に基づいた政策を掲げたりすることによって、人びとに対立構造を生み出す危険性があります。

ヘイトスピーチとは、「憎悪表現」とも「差別扇動」とも訳されます。いずれにせよ「悪口」の範疇を超えた「言葉の暴力」です。

この「差別扇動」には二つの弊害が生じます。一つには、ヘイトスピーチを繰り返すことによって、その対象となっているマインリティを「差別をしてもよい存在である」と社会に伝えてしまいます。

第二次世界大戦中、アウシュビッツに代表される収容所で引き起こされた、多くのユダヤ人の人びとが殺されたホロコーストは、ヒトラーが一人で起こしたものでなく、「ユダヤ人は出て行け」と

いう街角のヘイトスピーチからも始まり
ました。もう一つには、「沈黙効果」と
呼ばれるもので、ヘイトスピーチを受け
たマイノリティは、恐怖を感じ、自己喪
失感や無力感にさいなまれ、さらなる被
害を恐れて声をあげられなくなっていま
います。

また、1923(大正12)年9月1日「関
東大震災」における各地での朝鮮人虐殺
を忘れてはなりません。震災直後の混乱
の中、「朝鮮人が火をつけ暴動を起こそ
うとしている」「井戸の中に毒を投げ入
れた」というデマが広まり、政府は「戒
厳令」を発令しました。デマを信じた市
民による自警団が、朝鮮人や中国人らを
殺傷しました。

私たちが抱く「偏見」が「言葉」とし
て伝わり、やがてそれが街角のヘイトス
ピーチとなります。その究極の暴力が
「戦争」といえるでしょう。私たちにとっ
ての「表現の自由」は、憲法によって保
障されていますが「差別する自由」は許
されるものではありません。

教団では、『いまふたたび「水平社宣
言」に学ぶ(全国水平社結成100周年
にあたって)』の声明(一般財団法人同和
教育振興会 理事長 石上智康)において、

この100年の歴史は、差別との闘
いだけでなく、差別されることはも
ちろん、差別することもまた人間の
尊厳を損ねる悲しい行為であるとい
うことに気づいてほしいという願
い、すなわち「差別・被差別からの
解放」を願って闘われた100年で
ありました。

と述べています。
「私は差別をしない」だけではなく、
「私は差別に反対する、差別を許さない」
という姿勢が求められているのではない
でしょうか。

負の歴史を

繰り返さないために

私たちは、一体どういう社会をつくら
うとしているのか、望んでいるのかとい

うことが、今回の「感染症」「戦争」と
いう社会不安の中で、問い直されていま
す。

感染症の歴史から学べば、外出を自粛
し社会的距離をとるといふ公衆衛生的な
対策は、感染症の拡大を遅延させること
はできます。COVID-19についても、流
行拡大の速度を遅くすることで医療崩壊
を防ぐことができます。しかし、緊急事
態宣言等に伴う「行動制限」は、移動の
自由の制限に関わり、私権への介入とい
う危うさをはらんでいます。

ドイツのアンゲラ・メルケル首相(当
時)は2020年3月18日、COVID-19
対策の「ロックダウン(都市封鎖)」の
是非について、

渡航や移動の自由が苦難の末に勝ち
取られた権利であるという経験をし
てきた私のような人間にとり、絶対
的な必要性がなければ正当化し得な
いものなのです。

と、過去の経験から、国の進むべき方向
性を模索していたことがうかがい知れま

▶執筆者プロフィール



久林 高伸
ひさばやし たかのぶ

【略歴】 1969年生まれ
龍谷大学文学部(真宗学)卒業
【現在】 奈良教区葛城南組常德寺住職
「御同朋の社会をめざす運動」
奈良教区委員会広報部会長
本願寺派布教使
(一財)同和教育振興会講師団
講師

す。

私たちにも「三密の回避」が象徴的に提示され、生活にはさまざまな不都合が生じました。具体的には、「人と人との身体的接触」「対面での会話」「多人数の集合」等が制限されました。それらは「緊急避難的」な対応で終わらず、人と人との「分断」につながりかねません。

18世紀以降、ワクチンの開発や生物質の発見により、感染症の予防や治療が飛躍的に進歩しました。1980年の「天然痘根絶宣言」によって、感染症はもはや脅威ではないという風潮になりま

した。ところが現実には、動物由来の感染症が次々と発生しています。背景にあるのは私たちの社会環境の変化だといえます。

「ウイルス」は、太古の昔より互いの領域を棲み分け、人間と共存していました。

しかし、人間社会は利便性や快適性を求め、資源の採掘、農地の開拓、道路網の整備等を進め発展してきました。その結果、多くの「人とモノ」が短期間での移動を可能にし、私たちは快適な日常を営むことができています。しかしその代

償として、自然や生態系を破壊させたため、それまでの自然界との境界が曖昧になり、人の近くにいた動物を介して、さまざまなウイルスを拡散させました。

日本においては、遣唐使の往来によって、さまざまな制度や文化を取り入れることができました。しかしその反面「天然痘」が中国大陸や朝鮮半島から伝播し、時の天皇であった聖武天皇が、疫病の終息・社会の平安を願い、東大寺を建立し、大仏(東大寺盧舎那佛像)を造像されるほどの社会不安にもなりました。また、日本の近代化は、開国によって押し進められましたが、同時に人流の増加に伴う「コレラ」との関わりでもありました。よって感染症は、多様な人びとの関わり合いの中から生じた「社会要因」と認識して向き合うべきでしょう。

ニューノーマルの
方向性を探る

私たちは、一旦身に付けた習慣を変え

ることには、ストレスを伴い対応が難しく感じます。感染症対策の中で「ニューノーマル(新しい日常)」という考え方が、期待と不安を織り交ぜて肯定的に取りあげられました。逆説的に言えば、変化に対応できない人は、社会に取り残されてしまう新たな不安材料とも言えます。

しかし「不安を感じながら暮らす、不都合を抱えながら生活する」というのは、「感染症」特有のものだけではありません。例えば、非正規雇用で働く人たち、基地や原発の近くで生活する人たち、紛争地域で生きざるをえない人びとなど、私たちの社会にはさまざまな不安が山積しています。

ハンセン病と診断され「隔離」のなか、浄土真宗を生き抜かれた伊奈教勝さんからの、

人を排除して、そしてそのあとのものが幸せです、健康で楽しいですという、その幸せとはなんでしょう。それが本当の人間の喜びであり幸せでしょうか。しんどいけれど

も、困難だけれども、苦しいけれども、困る存在であるけれども、そのものも一緒に自分達の輪の中に加えて、そしてお互いに知恵を出し合っ
て共に生きる、共生の場をお互いに作り出していかなければならないの
じゃないでしょうか。
との言葉は、今の私たちに響く鋭い指摘
です。

さいごに

「分断」や「対立」をかき立て「憎悪」
によって一つになるのではなく、多様な
生き方を認め合う「連帯の社会」を望み
たいと思います。それが私たちの目指す
「御同朋の社会」であり「差別・被差別
からの解放」ではないでしょうか。宗教
は本来の意味である「三密」によって成
り立ちますが、それだけではなく「人と
人との繋がり」といった「密(支え合い)」
を大切にしたいです。「平和」はとても
不安定だからこそ大切に考え、私自身の

生き方を問い続けていく必要があるのです。

〈参考文献〉

- ・ 講座 同朋運動 第二巻【明石書店】
- ・ 感染症と人権(内田博文)【解放出版社】
- ・ 感染症と民衆(奥武則)【平凡社新書】
- ・ 病気の社会史(立川昭二)【岩波書店】
- ・ 世界史を変えた13の病(ジェニファー・
ライト)【原書房】
- ・ ヘイトスピーチと対抗報道(角南圭祐)
【集英社新書】
- ・ 民衆暴力(藤野裕子)【中公新書】